

明は、残酷きわまりないが、福祉社会において、なぜ生産性が停滞するかを示唆するものだし、同章の終わりの意思決定の神秘化も、経営者にとっては耳が痛む。

第三章「経済成長の神話」

の、成長を望むのであれば、生産性原理ではなく利潤原理でなければならぬ、という証明もフレッシュである。第四章「ケインズの神話」も、本当に彼が意図したのは何であったかを鋭くつく。投資の公共的調整こそ眼目であったのが、エビゴーネン

は、単純な完全雇用政策、安易な有効需要政策と読みかえてしまった。この誤りの代償こそ、インフレであるという結論は説得力を持つ。大学卒業以

後、経済学とオサラバした現代サラリーマンに、ぜひ一読してもらいたい本である。

刺激的話題に満ちた特派員報告

ピョートル・ウラジミロフ著
高橋 正訳

『延安日記』上・下

(著者は神戸大学教授 評者は東京信託銀行取締役 神崎倫一氏)
(日本経済新聞社 四八〇円)

周恩来が没し、やがて毛沢東も天寿を全うせんとしている今日、激動の中国革命史は、どのように書かれるべきか。文化大革命以来、中国では革命史の書きかえがすすんだが、そのような急場の書きかえが、いかに空しいものであったかは、林彪異変によってたちどころに明らか

になった。こうした経緯があるだけに、中国革命史は、史実に基づいて、その全体像を歴史の静止的な文脈のなかに相対化しつつ、しかも中国革命のもつダイナミズムを映し出すかたちで書かれねばならないだろう。

一九三〇年代前半の中国共産党最高指導者であり、一貫したでにモスクワで発行され、先には、コミンテルンの中国共産党

顧問であったオットー・プラウソン(李徳)の回想録も発表されて、これまで十分な光が当てられなかった三〇〜四〇年代の革命史の実像が徐々に明るみに出されつつあった。こうしたソ連側からする中国革命史の再構成は、このところきわめて活発であり、コミンテルンの軍事顧問の記録が相次いで刊行されたり、二〇年代の海陸豊ソビエトの指導者・彭湃が毛沢東を凌ぐ中国農民運動指導者として脚光をあびたり、中国革命の中心は延安ではなく、東北であったとする大胆な見方が出されて、東北の指導者・高崗(東北に「独立王国」を形成しようとしたとして粛清された)がクロース・

末川 博編著

《総収録法令》七六三件

岩波六法全書

51年版
発売!

A5判変型上製函入・クロス装・二九七六頁/四三〇〇円
〈追録 無料贈呈〉 7月発行予定の「追録」を贈呈いたします。巻末の「申込カード」によりお申し込み下さい。

《本年版の特色》▼商法・破産法・公職選挙法・政治資金規正法・特許法などの改正を完全に網羅し込み、第76回会までに成立した石油コンビナート等災害防止法などを新収録。
《新収法令》私立学校振興助成法・女子教員及び看護婦、保母等の育児休業法・船舶の所有者等の責任の制限に関する法律・大都市地域における住宅地等の供給促進特別措置法・宅地開発公団法・油濁損害賠償保障法・社会保険の最低基準に関する条約等
《主な改正法》高圧ガス取締法・都市計画法・都市再開発法・学校教育法・文化財保護法・航空法・実用新案法・窓匠法・商標法・勤労者財産形成促進法等

末川 博総編集

岩波基本六法

51年版

B6判上製函入・一六五四頁/一六〇〇円
▼実務と学習に必要な法令を網羅し三〇一件
▼各国の法令や日本の旧法令を比較参照できる
▼わが国唯一の六法全書▼充実している国際法部門▼完備した参照条文・総合事項索引
▼附録Ⅱ「法の成立と運営」手数料等一覧等

岩波書店 東京千代田一ツ橋

急速である。いうまでもなく「毛沢東一派」だけが中国革命を担ったのではないことを示すためである。

問題はソ連の官許出版

本書は、このような潮流のビークに位置する出版であり、一九七三年に『中国特別区——一九四二—一九四五年』と題されてモスクワで版行され、すでに英文版も出されている。著者は、スターリンのもとでコミンテルン連絡員兼タス通信軍事部特派員として延安の中国共産党中央委員会へ派遣された貴重な存在である。本書は、著者が毛沢東、劉少奇、康生、江青、周恩来、など当時の中国共産党指導者と日常的に接して得た記録や中共七全大会の状況報告など、どこから読んでも興味深く、刺激的な話題に満ちたものである。

とくに、毛沢東の党内指導権は、一九三五年の遵义会議ではなくて、四五年の七全大会において初めて確定したこと、延安解放区を訪れた米国代表团バレット大佐一行の中国共産党指導者との接触の状況(周恩来は

とくにアメリカ人と親密であった)、延安の特務工作の責任者・康生の猜疑心(とくに著者やコミンテルン、ソ連共産党にたいして)、若く美貌の毛沢東夫人、江青の著者への馴れ馴れしい態度などが克明に描かれているところは旺盛である。著者は「私は心を鬼にして真実だけを書かなければならない」とその立場を語っており、コミンテルンの連絡員でさえ日記だけが真実を綴れる唯一の場所であった当時の状況とともに、読者に訴えるものがある。

このような本書によって、中国革命史の通説が再検討されねばならない部分は数多いが、問題は、本書が今日の中ソ対立下においてソ連側の官許出版物として出現したところにある。

評者が本書の刊行を知ったのは七三年夏、本書の邦訳が進行しつつあることを知ったのは七四年暮れのモスクワにおいてであった。

それだけに本書が適訳者を立て立派に邦訳刊行されたことを喜ぶと同時に、ソ連の中国研究者のなかには、本書にたいしてきわめて痛烈な批判をもつ者も

多くいることを付記しておきたい。

(著者は元タス通信記者 評者は東)

京外国語大学助教授 中嶋雄氏
(サイマル出版会)
上下各二二〇円

農民共産主義者としての昌益像

寺尾 五郎著

『先駆 安藤昌益』

安藤昌益は謎の人物である。それは、一昨年はじめに、秋田県大館で彼の墓が発見され、その子孫の存在がわかった現在でも変わっていない。生年および生地は、いまだにつまりからでないし、その特異な思想がどのように形成され、またどのように実践されようとしたかも、ほとんど不明である。そこで、安藤昌益を語るばあい、一種の謎解きに似た興味が生ずることになる。

安藤昌益は謎が多いゆえに、こんにちの思想史界で問題になっているのかといえ、決してそうではない。昌益が問題になっているのは、その思想の特異性によってであり、しかもその特異な思想家をどう評価するか

で、意見がまったくわかれてしまっている。たとえば、中村幸彦は昌益を「舌耕家」とみなし、その思想は「不毛」だったといひ、奈良本辰也はその思想を「空想的社会主義の源流をなす」ととらえ、評者なぞは「農本的アナキズム」ととらえようとする。

で、意見がまったくわかれてしまっている。たとえば、中村幸彦は昌益を「舌耕家」とみなし、その思想は「不毛」だったといひ、奈良本辰也はその思想を「空想的社会主義の源流をなす」ととらえ、評者なぞは「農本的アナキズム」ととらえようとする。

これに対して、寺尾五郎は、「農民共産主義者」としての昌益像を、本書で描きだす。ここに、著者の「現代共産主義の先駆者」という揚言が可能になり、ひいては素題の「先駆 安藤昌益」という言葉が生まれるわけである。著者によれば、一七〇〇年代の昌益の思想は、すでに「唯物弁証法と唯物史観と共産主義」とにおいて、世界に

誇るべき水準を獲得していた、ということになる。では、かくのごとき思想がいかにして形成されたか。著者はまず、昌益が武士階級の出身であった、と断定する。この断定のうえに、元禄ごろ同じく武士を捨てた芭蕉や近松に、思想的近似性を見出す。武士階級を否定した三人のうち、芭蕉は「自然造化」に、近松は「男女の死を賭けた愛」に、昌益は「労働」に、それぞれ「真なるもの」をとらえた、と。

評者は昌益が武士階級の出身であるという断定には、全面的賛成をしかねるが、芭蕉や近松に思想的近似性を見出す仮説は、なかなか面白いとおもう。彼らの背景に元禄文化があり、彼らの心中に一定の封建制批判がある、という見方だ。

しかし、昌益を芭蕉や近松から分かつのは、彼が武士階級の否定にとどまらず、その「インテリ性をも自己否定」したことである。そしてこのことによって、昌益はインテリと対極にある農民階級に、思想的に通底することになった。つまり、昌益は農民の「直耕」に「真なるも